

白神のブナと秋田スギと能代海岸のクロマツ

どこかで白神山地という名前を聞いたことがあるでしょう。1993年、日本で最初に屋久島とともに世界自然遺産に登録されたところです。では、どこにあるかは知っていますか。東北地方の北西部、秋田県と青森県の県境にある山地で、標高1000m前後の峰々が連なっています。

世界自然遺産になった理由には、縄文時代から変わらない多様な生態系が残されていること、世界でも貴重な原生のブナ林があることが重要とされています。それが認められたきっかけは、ブナ原生林の林道開発と自然保護のしぎ合いが起こったことにありました。その経緯については、保護活動に関わっている人たちの伝説的な活躍が、語り継がれています。いまや、白神山地は地球と日本列島の自然と環境保護を学ぶことのできる象徴の地となっています。

このような堅苦しい話を聞くと、白神山地は自然保護の聖地のように思えるでしょうが、白神山地の南麓に暮らす私たち能代市民にとっては、毎日、目にしているただの山並みでしかありませんでした。だれもその名前を思ったことのない山々が、ある日、突然、世界自然遺産になったと言われ、多くの市民が驚きました。そして、その山々の総称が「白神山地」という名前だということを知った人が初めて知り、二重の驚きに沸きました。山菜やきのこの宝庫で、クマがたくさんいる山々で、峰々には名前があったものの山地全体については認識がなかったのです。地元の山を知るほんの一握りの人たちだけしか、白神の山々に踏み込めなかったことも関心を薄くしていたようです。でも、春先、残雪が輝く白神の山容は壮麗で、心を引き付ける迫力は変わっていません。

人を寄せ付けなかった山々であったことが白神山地を世界自然遺産にしたことは確かです。核心地域は、氷河期以降数千年間、人間の手で荒らされてきませんでした。また、山地全体が日本海から垂直に近い形でせり上がっている急峻な地形、現在でも少しずつ隆起していて地盤が弱く、崖崩れが多いことなども荒らされなかった要因となっています。日本列島に残された最後の秘境と言えるでしょう。ですから、世界でもこれまで例のない新しい酵母菌や乳酸菌などが発見されています。その応用が国内外から注目され、食品業界に変革の種を落とし始めています。その一つ、白神こだま酵母を使ったパン作り体験は生地を寝かせる時間が2時間と最速のため、普及しています。

白神の山の中は、一見すると日本のどこにでもあるような、奥多摩や富士の樹海と同じようなただの山の光景です。しかし、そこには人類にとって未知の世界がその中に潜んでいます。通りすがりでなく、ブナ原生林で終日、過ごしてみてください。きっと何かが感じられます。

白神山地から流れ出す水は、直接、日本海に注ぐ川と米代川に入る川があります。米代川は秋田県北部をその流域として取り込み、秋田スギ、米、金・銀・銅の産地として、平安時代から今日まで日本の経済を支えてきました。天然秋田スギは戦国時代すでに切り出され、伏見城や大坂城の建築に使われたという記録があります。能代市二ツ井町には、今でも、平均樹齢250年、約3000本の天然秋田スギが残されている林があり、その中には樹高58mの見上げててもてっぺんが見えない日本一高い秋田スギもあります。米代川の河口に位置する能代市は秋田スギの集散地として栄え、戦前は東洋一の木都として知られていました。現在でも、高い木材加工技術に支えられた木材製品が作られています。

米代川の流れと歩調を合わせるように、山に生えている秋田スギの林層の観察から、枝打ちなどの育林、伐採から山出しの作業、丸太の製材、柱や天井板などの木材製品製造までを川上から川下までという、一連の形で学ぶことができます。

建築で木の活用が見直されていますが、大都市では、子どもたちの教育の場、暮らしの場から、木のぬくもりが消えています。いじめや学校内暴力の割合が、コンクリートの校舎に比べて木の校舎が大幅

に低いという調査があります。それだけが要因とは言えないでしょうが、木が子どもたちの心に影響を与えていることは否めないでしょう。能代市では、小中学校の改築の際は、木造を基調として、建築基準法で規制があるところでもできる限り内外装に木材を使っています。市では、授業に支障がない限り、視察見学を受け入れています。教員や保護者を対象にした研修企画もこれから求められると思います。

能代市は日本海に面しています。シベリアから日本海を渡ってくる冬の季節風が真正面からやってくる場所にありま。風に強い日砂浜に行くと、砂が顔にバチバチと当たり、痛い思いをします。地吹雪が激しいときは、家々が並ぶ街中でも、目の前30センチが真っ白な世界になって、何も見えなくなります。ホワイトアウトです。ここで冬を暮らした人間でないと想像はできないでしょう。

海岸砂防林の「風の松原」は、この季節風と飛砂から能代の町と人々の暮らしを守ってきました。ここでは、樹齢百年を超える多くの太いクロマツが斜めに傾いています。自然の猛威の凄さを目の当たりにできる光景があります。この砂防林のクロマツは、およそ300年前から、一本一本、人間が手で植え、守ってきたものです。何も無い砂浜に作った人工の自然です。自然の力に挑んだ人間の戦いの結果ですが、現在では、その面影は一部にある縦横に整然と並び生えるクロマツの林に見られます。風の松原という愛称からは思い描けない苦闘の歴史が、この海岸砂防林にはあります。町や村を守るため、商人や村の肝煎たちが、私財を投げ打って砂防に取り組みました。藩の侍で、飛砂防備の担当になった役人も職を投げ打ち、私財までつぎ込み、生涯を賭けて植林を続けたことから、後に神様として祀られています。もし、風の松原がなければ、今でも、能代のまちは砂に埋もれてしまうでしょう。人々の暮らしと財産を守るために生きることの意義と、人間の力は自然の力のまえには弱いものであることを、風の松原は、幅1キロ、長さ14キロのその威容が静かに教えています。

このように、あきた白神、能代には自然と人間の関わりを象徴的に私たちに教えてくれるブナ、スギ、クロマツがあります。

(能代市環境産業部 戒屋 鉦希)